

原子力リスク研究センター (NRRC) 第 29 回 技術会議 議事録

1. 日 時：2020 年 1 月 30 日 (木) 10:00~12:00

2. 場 所：電力中央研究所 大手町本部 役員大会議室

3. 出席者 (順不同、敬称略)

主査： 横尾 (NRRC)

委員： 勝海 (北海道電力)、金澤 (東北電力)、谷・村野・山本 (東京電力HD)、
浜田・岩島 (中川代理：中部電力)、上野 (北陸電力)、
多田・吉原 (関西電力)、林 (中国電力)、橋本 (九州電力)、
山口 (日本原電)、大柿 (日本原燃)、石倉 (電源開発)、河村 (東芝)、
今野 (日立GE)、山岸 (三菱重工)、渥美 (電事連)、多田 (電工会)、
倉田 (原安進)、

高橋・岡本・白井・梅木・稲田・山本・朝岡 (NRRC)

オブザーバー：アポストラキス (NRRC)

4. 議事概要

(1) 2020 年度 NRRC 研究トピックスについて

○NRRC より、2020 年度の研究トピックスとして、「モデルプランとの研究構想と成果の適時性について」、「津波に対するリスク・影響評価_津波 PRA に必要な評価技術の開発」、「新検査制度に向けた事業者 PRA モデルの適切性確認状況について」について紹介がなされた。

(主なコメント ◆外部委員、◇電中研委員)

◆モデルプランの展開において、内部溢水はどのように展開しているのか。またハザードごとに「リスク評価技術の開発・高度化」と「パイロットプロジェクトによる適用性の確認」とあるが、展開の考え方を教えていただきたい。

◇溢水については、今年から PWR を対象にパイロットプロジェクトとして進めている。展開の考え方については、一つの発電所で高度化に使用した後、別の発電所に適用することもあれば、新たに発電所を選択するなど、ケース・バイ・ケースである。

◆津波に対するリスク・影響評価の「合理的なハザード評価手法」について、津波 PRA のハザード側にはどんな課題があるのか。

◇ハザードは自然現象のため、不確かさが大きい。不確かさには偶発的に起こるものと、知らないことによる認識論的不確かさの 2 種類がある。前者の対応は難しいが、後者については、専門家が合議をして決めていけば、不確かさは減っていく。確率論的に物事を見て、不確かさを減らしていく取り組みをしていくしかない。

(2) アポストラキス所長との意見交換

◇最近の日本全体の状況を踏まえて、懸念すべき材料があると思う。その一つが、日本で要求されている規制はすべて義務付けられていること。この規制体系を大きく変えるためには、①コストとベネフィットのバランスを考えることが重要であり、②事業者の自主的な取り組みが奨励される構造にしないといけない。

◆保安活動の合理化の話(10CRF50.69)でアメリカではなぜ事業者の自主的な取り組みに任されておらず、NRCの許可が必要なのか。

◇NRCが許可するのはイニシアチブの評価のみであり、実際の実施内容についての評価ではない。NRCと事業者の間で新しい取り組みを議論し、NRCがそれを許可すれば、どのように実施するかは事業者に任されている。リスク情報を活用した取り組みを実施するか否かは、アメリカでも個々の電力会社の裁量に任されている。

(3) NRRCの活動状況について

○NRRCより、「ワークショップ2020」、「第8回柏崎刈羽エキスパートレビュー開催」、「米国PRAピアレビューに関するワークショップの開催」、「第20回リスク情報活用推進会議の開催」についてニュースレターで報告を行った。

以上